

特選

日本銀行総裁賞

電子マネー

東京都・東京大学教育学部附属中等教育学校 3年 岡部 憲和

僕の携帯電話は、田山君と同じものです。機械の裏に、電子マネーのマークがついています。田山君とコンビニに行った時、彼が言いました。

「見てよ。絶対、感動するから。」

彼は、レジの機械に、携帯電話をサッと近づけました。「ピッ。」という音がして、彼は、お店の人にレシートをもらってきました。

「どうだ。すごいだろ。岡部もやってみろよ。すごく簡単だし、お財布の中身は減らないから、お得感があるよ。」

僕は、その時、電子マネーのカードを持っていたので、
「こっちがあるから、まだ、いいや。」

と言って、カードにお金をチャージしました。そして、レジへ行き、彼と同じように、買い物をしました。全く同じように、「ピッ。」という音が鳴り、お店の人からレシートをもらい、店から出ました。

「携帯の方が、やっぱりいいぞ。」

彼が、自信ありげに言います。僕は、ジュースを飲みながら、答えました。

「確かに、すごく速く買い物ができるのは、便利だよ。でも、僕、さっきチャージしちゃったから、財布に、現金がなくなっちゃった。なんか損した気がするな。」

すかさず、彼は言いました。

「そういうのも、ちゃんと考えないと、損をするから、気をつけた方がいいよ。」

「うん。そうだね。」

その後、彼としばらく話してから、僕は、家へ帰りました。

家へ帰るや否や、僕は、大変なミスをしてしまったことに気づきました。遊びに行くと言って、もらったお小遣いのおつりを、母に返すと約束していたのです。しかし、電子マネーでは、おつりを返すことが出来ません。僕は、急いでコンビニへ走りました。

「すみません。換金できますか。」

カードを出して、店員さんに尋ねました。

「それが、このカードでは、換金できないんですよ。」

「えっ、どうして。」

僕は、がっかりしてしまいました。電子マネーは、特定の場所でしか使えない上に、現金に換えられないこともあり、扱いが難しいと思いました。

どうしようか考えながら家へ帰ると、今度は、母が、パニック状態になっていました。機嫌が悪そうでした。僕はすぐ、母のもとへ行き、謝りました。

「ごめんなさい。もらった1,000円は、電子マネーにしちゃったから、すぐには返せないんだけど。」

母は、それどころではないといった口調で、僕に尋ねました。

「ねえ、ここに置いてあった、クレジットカード、見なかった。」

なんと、クレジットカードをなくしたというのです。母の慌てように驚いたのか、父まで、部屋から出てきました。

「何が、あったんだ。」

僕が事情を話すと、父の顔色が、急にくもり始めました。

「おちついて。とにかく、おちついて。それから、警察と、カード会社に連絡すること。」

「警察。」

僕は、飛び上がりました。ただのカードなのに、警察沙汰になるなんて、全く想像していなかったのです。

「カードは、悪用されたら、大変なことになるんだ。知らないうちに、家の財産が、なくなってしまうかも知れないんだ。すごく大変なことなんだよ。」

僕たちは、部屋中隅々まで、何度も捜しました。僕や妹の部屋まで、徹底的に捜しました。しかし、見つかりませんでした。母は、夕食の時、家族全員に謝りました。

「今日は、私がカードを落としてしまい、みんなに迷惑をかけて、ごめんなさい。もう、警察には連絡をしました。カード会社の方にも、伝えたから、無断で使われることは無いわ。ほんとうに、ごめんなさい。」

こんなにも真剣に、母が謝る姿など、一度も見たことがありませんでした。僕は、事の重大さが、やっと分かりました。カードを持つ怖さが、理解できたと思いました。

2、3日して、リビングのソファの下から、カードが出てきた時、母と父は、泣きながら喜んでいました。

僕は、今回の件で、電子マネーやクレジットカードを使う時は、注意しなければならないと思いました。使い方を間違えれば、すごく怖いものになるからです。僕は、これから先も、クレジットカードや電子マネーを使っていくと思います。しかし、その時々、今回のことを踏まえて、大切に扱っていかねばいけないと、しみじみ感じました。